

### 3. 経営成績及び財政状態

#### (1) 当中間期業績等の概況

##### 一業績の状況

当中間期の一般用医薬品事業は、冷夏と長梅雨の影響などで個人消費が今一つ冴えず、極めて厳しい事業環境に置かれました。また医療用医薬品事業も、医療費適正化の諸施策の浸透の下に引き続き難しい事業環境に置かれております。

当社はこのような状況の中で、新製品の投入や販売態勢の強化に努めるなど、積極的な営業活動を展開しましたが、連結売上高は1,462億8千8百万円余（前中間連結会計期間比+60億4千2百万円余、4.3%増—以下括弧内文言「前中間連結会計期間比」省略）になりました。

事業部門別の売上高は次のとおりであります。

セルフメディケーション事業	993億円余	(△ 39億円余、3.8%減)
内訳		
一般用医薬品等	941億円余	(△ 40億円余、4.1%減)
特定保健用食品等	44 "	(△ 0.0 "、0.2%減)
その他	7 "	(+ 0.6 "、9.5%増)
医薬事業	469億円余	(+ 100億円余、27.1%増)
内訳		
医療用医薬品	395億円余	(+ 94億円余、31.4%増)
その他	48 "	(+ 5 "、11.6%増)
工業所有権等使用料収入	25 "	(+ 0.4 "、2.0%増)

国内における売り上げの動向は次のとおりであります。

セルフメディケーション事業では、ドリンク剤の「リポビタミンシリーズ」は前期に発売した「リポビタミン8Ⅱ」(+8億円余)や新製品「リポビタミンウインズ」(+2億円余)などの貢献がありましたが、主力の「リポビタミンD」(△29億円余)などが冷夏の影響で落ち込み、全体ではマイナス(△30億円余、5.0%減)となりました。風邪薬「パブロンシリーズ」は微増(+0.5億円余、0.4%増)でしたほか、胃腸薬(+1億円余、4.2%増)、本年1月より当社の直販に移行したドロップタイプののど薬「ヴィックスメディケイテッドドロップ」(+2億円余、101.7%増)などはプラスでした。壮年性脱毛症における発毛剤「リアップ」は、昨年9月発売の細別120mlの実績をカバー出来ずマイナス(△7億円余、8.2%減)でした。

海外におけるドリンク剤の売り上げは、タイ、台湾、マレーシアなどで伸びを示したものの、全体では微減でした。

医薬事業では、売上高が前年同期比+100億円余、27.1%増と大幅に増加しましたが、これは富山化学工業株式会社と共同出資(当社が55%出資)して設立した連結子会社大正富山医薬品株式会社の売り上げのうち、富山化学工業株式会社製品の売上高(97億円余)が売り上げ増に直結することが主因であります。

富山化学工業株式会社の製品の内訳は、別添の通りであります。

当社製品では、主力のマクロライド系抗生物質「クラリス」は上伸(+8億円余、7.6%増)しましたが、末梢循環改善剤「パルクス注」は2桁のマイナス(△11億円余、14.6%減)でした。一方、非ステロイド性消炎鎮痛剤「ロルカム錠」(+2億円余、11.0%増)と不整脈治療剤「アンカロン錠」(+3億円余、18.1%増)は順調に成長しております。

なお、医薬事業に含まれている海外からのロイヤリティ収入は、微増(+0.4億円)でした。

コスト面につきましては、研究開発費、広告宣伝費などは減少しましたが、大正富山医薬品株式会社の立ち上げなどに伴ない、売上原価率の上昇や人件費、販売促進費等の経費増があつて、経常利益は、337億7千1百万円余(△31億5千2百万円余、8.5%減)、中間純利益は196億6千4百万円余(△19億2千8百万円余、8.9%減)となりました。

## 一連結キャッシュ・フローの状況

当中間連結会計期間末における現金及び現金同等物（以下「資金」という。）は、1,003億6千4百万円で、前中間連結会計期間末に比べ、497億7千9百万円増加致しました。

### （営業活動のキャッシュ・フロー）

営業活動の結果得られた資金は277億6千7百万円（△43億1千4百万円余）となりました。税金等調整前中間純利益が328億9千1百万円（△37億5千9百万円余）、売上債権の増加によるキャッシュ・フローが△149億2千2百万円（△142億9千3百万円余）と減少しましたが、法人税等の支払額が68億4千万円（△93億9千5百万円余）と減少した他、仕入債務の増加によるキャッシュ・フローは86億4千万円（+88億2千1百万円余）と増加しております。減価償却費は75億6千5百万円（△3億1千万円余）ありました。

### （投資活動のキャッシュ・フロー）

投資活動のキャッシュ・フローは361億6千6百万円（+269億3百万円余）増加しました。有価証券の売却及び償還による収入が210億円（+18億9千9百万円余）、3ヶ月超の定期預金からの振替による増加が337億2千3百万円（△32億1千7百万円）ありましたが、投資有価証券の取得221億1千6百万円（△82億8千6百万円）も行なっております。前年同期と比較しますと、大宮工場再開発、本社2号館建設などの設備投資が一巡したこともあり、有形固定資産の取得が28億2千万円（△68億1千8百万円）と減少した他、昨年は富山化学工業株式の取得や「ヴィックスメディケイテッドドロップ」の商標権取得などの特殊要因があったため、それぞれ関係会社株式の取得がゼロ（△186億6千2百万円）、無形固定資産の取得が14億円（△62億2百万円余）と投資額が減少しています。

### （財務活動のキャッシュ・フロー）

財務活動の結果使用した資金は257億千3百万円（+91億4千7百万円余）となりました。これは自己株式の取得が157億8千7百万円（+77億2千万円余）と増加したこと、創業90周年記念配当実施により配当金の支払が99億1千2百万円（+14億5千4百万円余）と増加したのが主な要因です。

## キャッシュ・フロー指標のトレンド

	平成14年3月期	平成15年3月期		平成16年3月期
	期末	中間	期末	中間
株主資本比率（%）	82.5	82.8	84.1	81.5
時価ベースの株主資本比率（%）	111.9	107.9	96.3	94.4
債務償還年数（年）	0.0	0.0	0.0	0.0
インタレスト・カバレッジ・レシオ	2,232.7	8,020.5	4,109.2	13,883.5

（注）株主資本比率：株主資本／総資産

時価ベースの株主資本比率：株式時価総額／総資産

債務償還年数：有利子負債／営業キャッシュ・フロー

インタレスト・カバレッジ・レシオ：営業キャッシュ・フロー／利払い

\*各指標は、いずれも連結ベースの財務数値により計算しております。

\*株式時価総額は、期末株価終値×期末発行済株式数（自己株式控除後）により算出しております。

\*営業キャッシュ・フローは連結キャッシュ・フロー計算書の営業活動によるキャッシュ・フローを使用しております。

有利子負債は、連結貸借対照表に計上されている負債のうち利子を支払っているすべての負債を対象としております。

また、利払いについては、連結キャッシュ・フロー計算書の利息の支払額を使用しております。

## (2) 通期の見通し

下期は一段と厳しい事業環境が続くことが予想されますが、引き続き積極的な営業活動の展開および経営全般の効率化などを推進してまいります。

この結果、通期の連結業績は次のとおりとなる見通しであります。

（平成15年3月期比）

売 上 高	2,980億円	（8.7%増）
経 常 利 益	602億円	（1.1%減）
当 期 純 利 益	348億円	（1.7%減）